GOD EATER 2　鬼と姫

六★花

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どうもついにしてしまったー
Ｇｏｄｅａｔｅｒ??セラフ＆多作
しかも今回は転生物語テンプレ
主人公の物語楽しんでください
原作から入るので
過去から始まるのつまんなーい
という人は是非みてください
注》神は女デスヨ

目次

神との遭遇、転生
転生と家族 ―― 1
GODEATER ―― 8
訓練と猫?! ―― 13

神との遭遇、転生
転生と家族

死んだ
いきなり何を言っているのだと思うだろう
自分でも、そう思う。だが、事実だ。
お約束の車に轢かれそうな子を助けて
最後に頭にある言葉は
「お兄ちゃん、助けてくれてありがとう」
そして、意識が途切れて、今に至る。
「イヤー君みたいな人久し振りに見たよ」
???
何か声がする、後ろからだ。
振り返ると、そこには
子供がいたw

「子供って言わないでくれるかなー」
　何故ばれたし
「いやいやいや、僕神だもん、
　年齢２，０００歳超えてるからね
　君なんかよりよっぽど知識あるし」
　そうか、・・・・・って納得できるかー！
「まぁ、とりあえず君は魂だけだ。
　でもせっかくだし生き返らせてあげる。
　でも、元の世界は無理、どうしようかな？
　君、なんかいきたいところある？
　アニメやゲームの世界なら、なんでもいいよ
　いくつかそうだなぁー、５、６個なら特典
　つけてもいいよ。どうする？
　生きる生きないは君の自由だ」
　なら答えは決まってる
　生き返って、新しい世界で、
　いろいろな人を助けてやる

「ＯＫ、人助け、君は命をかけれるかい？」
　ああ、その特典とやらがあるなら問題ねえ
「よし、なら君の第２の世界は
　Ｇｏｄ　ＩＴＥＲそれも２の時系列からだいいね？」
　おう、でもなんで２から？
「え?!、えーと、それはー
　そのー、うーんと」
　どうなんだよ
「あーもう知らない作者が２しか
　した事がないからだよ」
　そんな事!?
　まあ、いいや次に特典だけど
「うん６つから７つまでいいよ」
　なら、
　１つ目は、終わりのセラフに出てくる
　阿朱羅丸と真昼ノ夜を神機にしてくれ

２つ目は、その世界で最強の
身体能力と頭脳を
３つ目は、原作で死んだキャラの
死亡フラグを全部折ってくれ
４つ目は、俺以外の転生者がないように
そこで、争いが起こるのはやだから
５つ目は、ヒロインってか、嫁さんを
フランさんにしてもらえる？
６つ目は、化ける力どんな生き物にも
化けれる力をくれ
最後は神お前俺を復活させたらどうなる？
「うん？僕かい？死ぬよ
普段死ぬ人を生き返らせるんだ
それくらいの代償は払う事になる」
なら決まりだお前が俺の体の中の精神として
入ってくれ
「どういう事？」

つまり、俺とお前人格を2つにしてくれ
「なんで？」
んー理由は2つ1つは俺が気絶しても
お前が戦ってくれるだろ
2つ目はお前、こんな何もないところで
一人でいたんだろだったら
俺がお前の友達になってやる。
家族になってやる。
一人は寂しいしそのまま死ぬなんて俺が
許さねー、それに、新しい世界で
一人は俺もやだからな
「・・・それでいいのかい？
僕なんかを、助けてもメリットなんか
何にもないよ？」
それでもだそれに
自分がピンチの時助けてくれるなら
それだけでメリットさ

あとは、お前のメリットだ。
どうだ？叶えてもらえるか？
「ありがとう、ありがとう
うん、なら行こう新しい世界へ」
「これからよろしくね
白夜優鬼
これが君の新しい名前だ！」
「おう、頼んだぜ
えーと？名前は？」
「僕の名前は白夜優姫にしよう」
「君と同じ優しいに姫をつけるよ」
「よし、じゃこれから頼んだぜ
優姫！」

――――――――――――――――――――――――――――――――

「なんでしょうこの、不思議な感じは」

「さあ？何かしらね？」

そこには二人の博士と言われる人物がいた

GODEATER

「緊張しなくて良いんですよ」
いやいや緊張してんじゃなくて
怖いんですよ。原作知ってるから
何が怖いって?ラケル・クラウディウス
あなたとその腕輪つけるときの痛みが
嫌なんです。
絶対痛いでしょ。嫌だ嫌だ。
『優鬼、君はアラガミにもなれるんだから
今更痛みなんて感じないよ』
マジで?!助かった。って、
全然そうには見えないんだけど
あゝ降りてきたー
「っつ!」
痛った!?・・・ってあれ?

本当に痛くない、本当に
なんか拍子抜けしたなー

ーーーそして何事もなく終わったーーー

「終わったー。ん？アレは？」
フランさんだー。ＧＯＤＥＡＴＥＲで
好きな人の中でも上位の人
話しかけてこよー
「すいません、何か訓練か何か
ありませんか？」
フラン「？まだオラクル細胞が定着して
いませんよね？、もし暇でしたら
庭でも見てきては？」
「庭？庭があるんですか？」
自然と自然と初めて知ったように
フラン「ええ、ありますよ

あのエレベーターを使って」
「ありがとうございます。
えっとお名前は?」
フラン「ああ、すいません。私は
フラン＝フランソワ＝フランチェスカ・ド・
ブルゴーニュと言います。なg・・・
「フラン＝フランソワ＝フランチェスカ・ド・
ブルゴーニュさんですね、わかりました」
!?覚えられたんですか?」
「ええ、覚えましたけど?」
フラン「ありがとうございます。
長くて、なかなか覚えてもらえなくて、
でも本当に長いので、フランでいいですよ」
「分かりました。一応自己紹介
しておきますね。フランさんにだけ
紹介させるのも悪いので
自分は白夜優鬼です。

コレでも男なのでこれから
よろしくお願いします」
フラン「はい！優鬼さん」
「では、庭に早速いってきますね」

ーーー移動中ーーー

「おー綺麗だなー」
「ん？新入りか、これからよろしく」
「?!?!」
ジュリウスか
「おっと、自己紹介を忘れていたな
俺の名前は、
ジュリウス・ヴィスコンティ
お前が今日から着任する、ブラッドの
隊長だ。よろしく頼む」
「あ、えっと自分は」

ジュリウス「硬くならなくていいぞ」
「わかった、僕は
白夜優鬼、よろしくジュリウス」
ジュリウス「ああ、よろしく」
「良いだろう、ここは、俺は
暇があればここで寝ている」
「確かに良いですね」
ジュリウス「おっと、そろっと
良い時間だ。優鬼、これから
訓練をするぞ、ロビーのカウンターに
フランというオペレーターがいるその人から
任務として受けてくれ。いいな？」
「りょーかい、ジュリウス
ジュリウスはどうするの？付き添い？」
ジュリウス「いや、俺は管理室からみている」
「わかった、いってくるよ」

訓練と猫?!

俺の名前は
ジュリウスヴィスコンティ
俺は今ありえない物を見ている
俺の目線の先にあるもの
それはある一人の少年だ。
少年の容姿ははたから見ると
女の子?!と、思うほどの顔立ち
で肌もどちらかといえば女性にちかい
しかし体のつくりがおかしいのだ。
まずスピード
俺が目で追えない
ただ速いだけなら良いだろう
だか、俺が目で追えないのだ。

自惚れる気はさらさらないが
それでもアラガミが血を体を
流れているようなもの、というか
オラクル細胞という人体には
無いものを摂取しているのだ。
この力は人間には引き起こさない力を
出すことのできるもの
その強化された俺が目で追えないのだ
おそらく、一般人には
凄い風が通り過ぎたと思うだろう。
しかも全力疾走ではない
精々５０％
さらに、もう１つ俺がありえないと
思う事が起きた。それは
オラクル細胞を体に入れる時
彼は、痛がらなかったのだ
それの何がおかしい？そう思うだろう

しかし、だオラクル細胞は
説明していなかったが
生物だろうが有機物、無機物問わず
なんでも食らう生き物
通称、荒ぶる神と書いて【アラガミ】と言われる
その【アラガミ】の細胞である
オラクル細胞が、全てを食らう
のだ。では、その細胞を人体に摂取
すればどうなるか。簡単だ
体を、食われたような激痛が走る
しかも失敗すればその【アラガミ】に
なってしまうのだ。
それを聞けば誰もがおかしいと思うし
言うだろう
「た・いち・う」
ん？
「隊長」

ああ、呼ばれていたのか
「どうした?」
「終わりました」

なっ?!なんだとさっきの内容は
一時間を優に超える位の
訓練のはずそれを、それを
1分で片付けたのか!?

なんか、固まったなジュリウス
どうしたんだろうか
「ジュリウスー」
聞こえたかな?

「あ、ああ今日はコレで終わりだ」
「お疲れ様でした」

そしてその前ここにいよう

「そう、そんな子が」
俺は今あった事をその前
彼女ラケル先生に報告していた

「面白くなりそうね」
「ええ、本当にね。ラケル」

「さてと、この後どうしようかな?」
「お、きみきみもしかしてブラッド隊酒井」
そはものすごい形でかつそ凄そうな
髪型をしている女の子
えーと名前は
「私の名前はナナ。よろしくね」
そうだ、ナナだ。
原作の中でも、上位に位置する
キーキャラだ。
その後他愛のない、話を少しして
その日を終えて行ったのであった

ちなみに、ナナは
訓練の時間が1分だった事を伝えると
凄ーく悔しがっていたのが
今でも頭の中の

新しい記憶として
のこっている。